図9: 自然への抵抗としてのエンジニアリングと芸術 *O #9.1 (図8) 自由エネルギーの最小化としての葛藤の解消の帰結として、 人間は自然を予測可能なものとするために、 ・自然についての知識を体系化し、 ・その知識に基づいて自然を制御する制度や什組みを構築する (=「エンジニアリング」)。 #9.2 エンジニアリングが持つダイナミズムは、 **四**つのディスクールを用いて**表現**することができる。 #9.3 このダイナミズムは、 エンジニアリングによる捕獲を逃れる 不確実性としての対象aにより駆動される。 #94 エンジニアリングがどれほど発達しようとも、 不確実性としての対象aが根絶されることはない。 #9.5 不確実性と直面する機会を積極的に織り込むことで エンジニアリングのダイナミズムを活性化させて、 より良い満足を生みだしていこうとする思想を 「アジャイル」という。 #9.7 残留する対象aは トラウマ的な体験として反復強迫するが、 それを「美的」に解消する試みが「芸術」である。 自然界において、 未来を厳密に予測しきることは 不可能であるため。 #9.8 美的とは、 「将来における対象aの発生を防ぐための エンジニアリング的機能を持たない| という意味である。

#9.9

エンジニアリングにおける 主人のディスクールとは、

- ・新しく確立された視点や問題の枠組み(=S1)から、
- ・さまざまな**物事 (=S2)** が

規定され位置づけなおされていく(=S1→S2)過程である。

・主体 (=\$) は

S1を確立すること(=S1/\$)で不確実性を解消しようとするが、その他方で新たな不確実性が生まれる(=S2/a)。

・この新たな不確実性には、

その視点に立つ限り解消できない部分が含まれる(\$//a)。

#a 10

エンジニアリングにおける**大学**のディスクールとは、

- ・既に確立された視点や問題の枠組み(=S1)に根拠を持つ
- 様々な命題 / 仕組み/制度など(=S2/S1) を、
- ・S1に変更を加えないまま拡張していくことで 不確実性を解消していこうとする(=S2→a)過程である。
- ・その過程は不徹底に終わるため、

残存する予測誤差が主体 (=\$) を発生させる (=a/\$) が、

・このディスクールに立つ限り不確実性の解消は一応作動し続けているため、 主体はS1に変更を敢えて加えようとはしなくなる(=S1//\$)。

HO 11

エンジニアリングにおけるヒステリー者のディスクールとは、

- ・自身が抱える予測誤差あるいは不確実性 (=a) の解決 (=\$/a) を、
- ・既に確立された視点/問題の枠組み/権威を持つ他者 (=S1) により 達成しようとする試みであるが、
- ·S1は有限の知 (=S2) しか牛みだせず (=S1/S2)、

それが自身の不確実性を解決することはない(=a//S2)ため、

・結果はS1に対する失望に終わり、

S1は手段としての信頼を失墜させる。

#9.12

エンジニアリングにおける分析家のディスクールとは、

- ・自身がそれまで依拠していた認識 / 仕組み / 制度など (=S2) に起因するうまくいかなさ (=a/S2) が眼前に現れる $(=a \rightarrow \$)$ ことで、
- ・主体はそのうまくいかなさの解消を目的とした 新たな視点や問題の枠組み(=S1)を生みだすように 思考を強いられる(=\$/S1)。
- ・新しく生み出されたS1は、

それまで依拠されていたS2とは整合性を持たない(=S2//S1)ため、 速やかに主体は主人のディスクールへと移って世界の再構築が行われる。